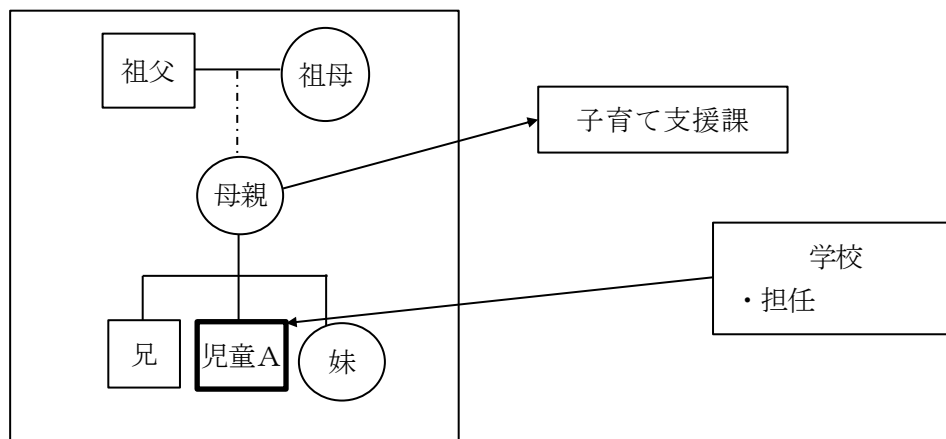
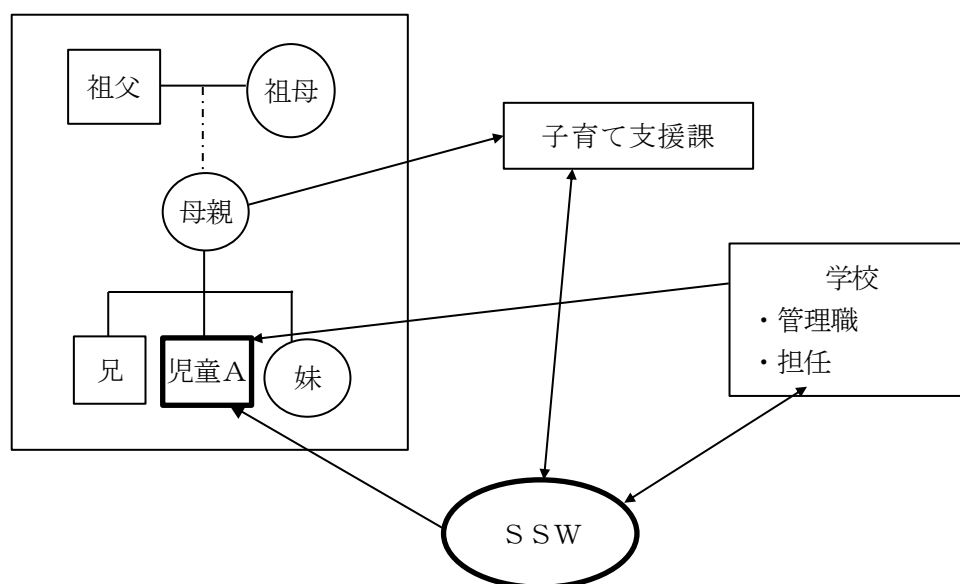


子育て支援課と学校とをつなぎ学校での効果的な指導にいかしたケース

【SSWの支援前】



【SSWの支援後】



1 気になる状況

- 児童Aは、学習に対して意欲的に取り組む様子が見られない。
- 児童Aは、朝、登校を渋ることがあり、昼から登校することがあった。
- 母親は、学校に行くことを拒むことに困り感をもっていた。
- 母親は、子育てに加え、同居する両親への対応に思い悩んでいる。
- 母親は、学校の当該生徒への指導方法について不安を抱えていたが、学校の指導方法の不安について、直接担任に伝えることができずにいた。
- 母親は、就学前から関係のあった子育て支援課担当者に、学校の不満について相談していたが、相談に対応した学校での指導に結び付いていなかった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、母方の祖父、祖母、母親、兄、妹の6人で暮らしている。
- 児童Aは、特別支援学級に在籍しており、身の回りのことなど、日常生活を送る上で、支援が必要である。
- 母親は、小学校への不信感が強く、子育てや学校での指導についての悩みを、学校ではなく子育て支援課担当者に相談していた。
- 母親からの相談を学校につなぐ仕組みが確立されていなかったため、児童Aに対する学校での指導に結び付いていない。

3 ケース会議の状況

- 参加者
 - ・ SSW、子育て支援課担当者、学校管理職、特別支援教育コーディネーター
- 目的
 - ・ 児童A、母親への支援の状況等、情報共有を図った。

4 プランニング

- 学校
 - ・ 児童Aに対する指導方法については、児童Aの成長を優先した内容となるよう検討する。
- SSW
 - ・ 母親が、不安に感じていることを直接、学校に相談するのではなく、信頼関係のある子育て支援課担当者に話すことを望んでいるため、子育て支援課担当者との情報共有を密にする。
 - ・ 母親との信頼関係を築くため、子育て支援課担当者を交え、母親との面談を適時実施する。
 - ・ 学校の管理職、特別支援教育コーディネーターと情報共有を図る。

5 社会資源の活用状況

- 子育て支援課が、母親の相談を受けるなど、母親のサポートを行っている。

6 当該児童の変容（成果と課題）

<成果>

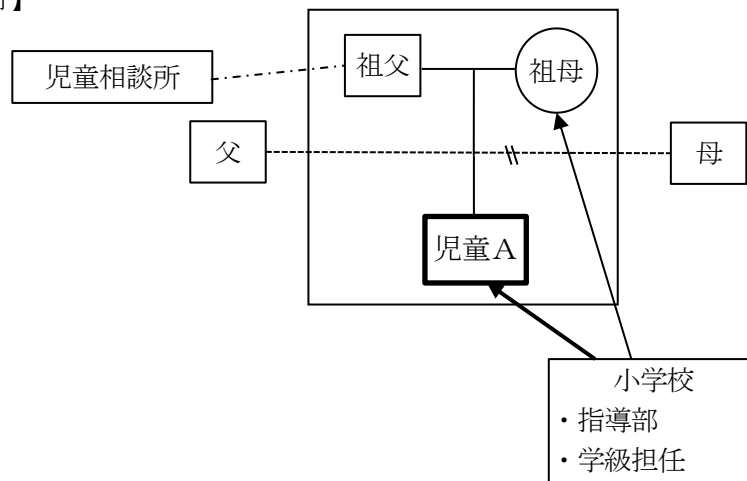
- SSWが子育て支援課と学校を結ぶ付けたことにより、学校が母親の不安や不満を理解し母親に対応するようになったため、母親が学校の対応に安心感をもつようになった。
- 学校では、情報共有を踏まえて当該生徒への指導方法を検討し、母親との一層の信頼関係の構築に向けた取組を始めた。

<課題>

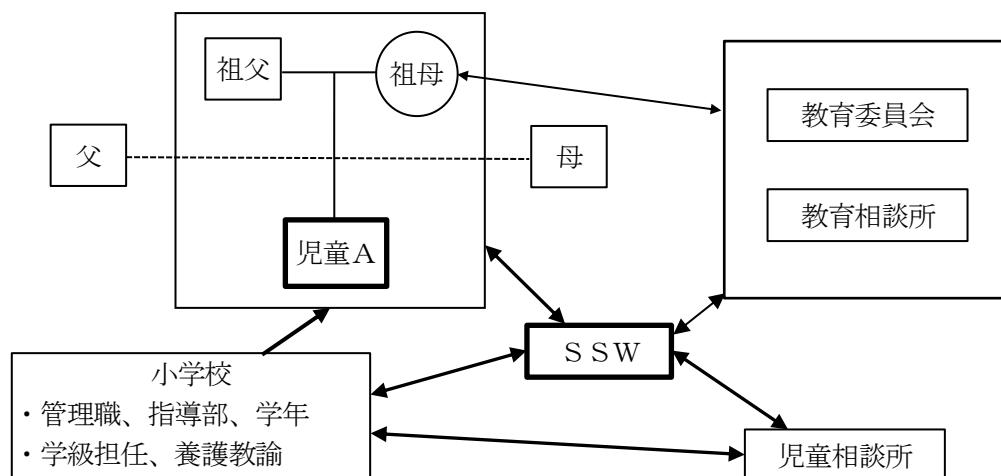
- 今後も継続的に、母親と学校との信頼関係が築けるよう、SSWが、支援する必要がある。

問題の解決に向けて学校・保護者・関係機関をつなげながら支援したケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 児童Aの保護者は、児童Aの養育に困難さを抱える等の事情があり、現在、祖父母が養育している。
- 児童Aと同じ学級の児童数名が、学級担任に対し、「児童Aにいらまれた」と訴え、学級担任が児童Aに対し事実確認したところ、児童Aは級友をにらんだことを認めた。
- 学級担任は、児童Aに対して、級友をにらむことをやめるように口頭で指導し、その課題や対応について、学校全体で共有していなかった。
- 児童Aの保護者は、児童Aの小学校入学当初から、学校の指導に不信感があり、教育委員会に対し、「子どもが学級でいじめられている」「学級担任の対応や指導が不適切」と訴えていた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは、優しい性格で、周りの子に気遣いができる。
- 児童Aは、幼稚園の頃から友達をつくるのが苦手だった。
- 児童Aは、自分の気持ちを友達などに伝えることで「怒られるかもしれない」「何か言われるかもしれない」「信じてもらえないかもしれない」等と想像し、話すことを苦手としている。
- 児童Aが在籍する学級は、前年度は児童が落ち着かない状態にあり、今年度、学級担任が替わった。

(2) 学校との情報共有の状況

- S S Wは、学校と情報共有を行い、校内の指導体制に合わせて、休み時間や授業時間を利用し、児童と関わりながら児童Aを見守っている。

3 ケース会議の状況

- ケース会議3回
 - ・ 構成員：校長、教頭、学級担任、学年部長、指導部長、養護教諭、特別支援教育コーディネーター、S S W、教育相談所、教育委員会
 - ・ 内 容：保護者が訴えたいじめに関する状況の把握、今後の指導方針、児童Aの支援の在り方、保護者に関する情報共有
- 保護者を交えたケース会議3回
 - ・ 出席者：児童Aの保護者、校長、教頭、指導部長、S S W、教育相談所、教育委員会
 - ・ 内 容：児童Aの保護者とともに、児童Aの対人面に関する課題の解決に向けた指導の方向性について協議

4 プランニング

- 学校
 - ・ 児童Aの保護者は学校に対する不信感が強く、保護者との連絡を密に行うとともに、学校の指導方針を理解していただけるよう、校内の指導体制を整える。
- S S W
 - ・ 学校の組織的な対応をサポートするため、学校及び関係機関との連携や情報共有を支援する。
 - ・ 児童A及びその保護者との関わりを増やし、学校以外のアプローチの場を確保する。

5 社会資源の活用状況

- 教育相談所は、相談機関として、主に保護者に対するサポートを継続する。
- 教育委員会は、全体を掌握し、必要に応じて関係機関との連携の窓口となる。
- 学校及び教育委員会は、児童相談所と児童Aの家庭の状況について情報を共有した。

6 当該児童の変容（成果と課題）

<成 果>

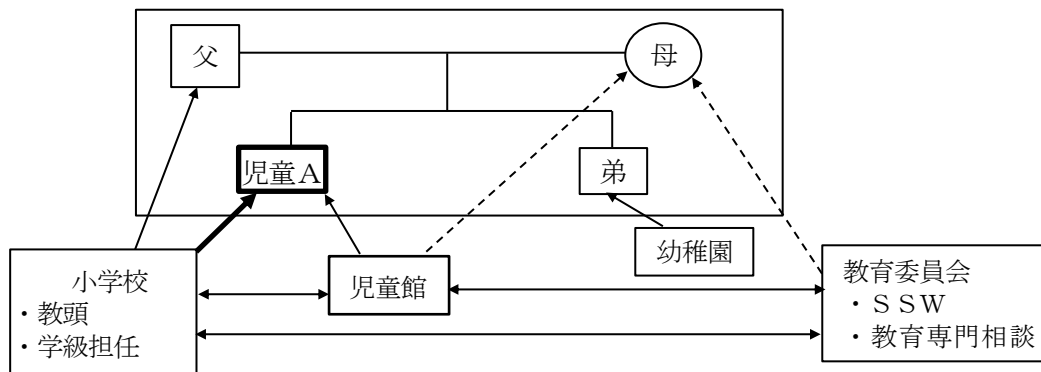
- S S W及び関係機関が連携して対応したことにより、保護者の学校に対する不信感が軽減し、保護者の理解・納得の下で指導を行うことができた。
- 児童Aに対する組織的な指導体制を構築したことにより、児童Aは対人関係の課題を乗り越え、安心して学校生活を送ることができるようになった。

<課 題>

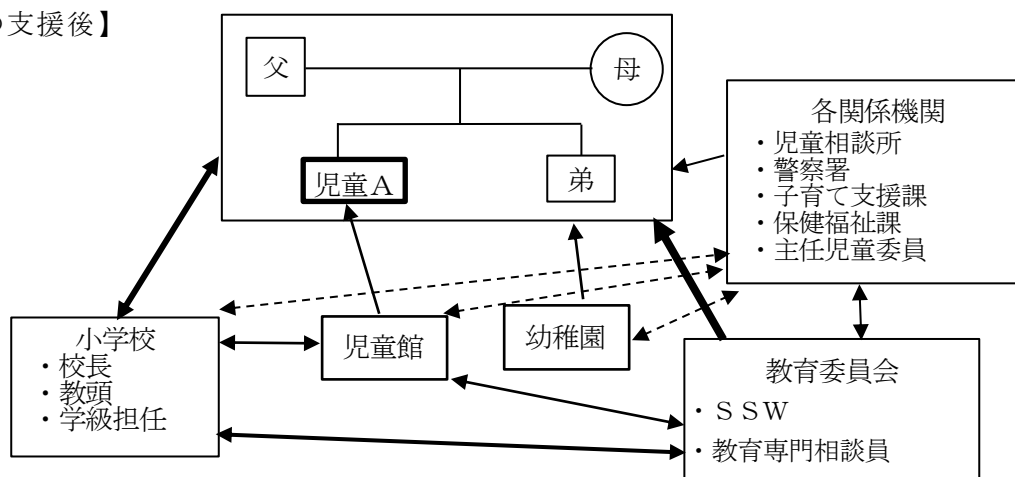
- 児童Aの発達の課題に対する支援について、学校として組織的に対応する必要がある。
- 保護者の子育てに対する困り感について、適切な相談機関につなげる必要がある。

養育に不安を抱える両親にSSWが支援を行ったケース

【SSWの支援前】



【SSWの支援後】



1 気になる状況

- 児童Aの父親は、兄弟が失敗した時や指導に従わない時には威圧的な態度で接している。以前、当該児童の弟の顔の腫れを発見した幼稚園の通報により、父親の暴力が発覚したことがあった。
- 児童Aの母親は、学校や児童館から児童Aの問題行動の連絡を受けるが、状況を理解したり、養育の困り感を関係機関等へ発信したりすることができない。
- 児童Aは、情緒が不安定になると教室から飛び出したり、乱暴な言動をしたりしている。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aの家族構成は、父親、母親、当該児童、弟の4人家族である。
- 児童Aは、情緒面に問題を抱えているが、通常学級に在籍している。
- 児童Aは、父親に恐怖心を抱いており、特に当該児童については、その反動が学校や児童館での問題行動につながっている。
- 学校は、児童Aが興奮した時には、教頭による個別指導で対応している。
- 学校は、児童Aの父親と定期的な面談を行うとともに、児童Aの学校での様子について

て定期的な情報交換を行っている。

(2) 学校との情報共有の状況

- S S Wは、教頭との面談を通して情報の共有化を図っている。

3 ケース会議の状況

- 目的：両親の子ども理解と養育態度の支援
- 回数：2回
- 参加者：校長、教頭、学級担任、園長、担当教諭、主幹、児童相談所、子育て支援課、母子通園センター、児童厚生員、主任児童委員、教育専門相談員、S S W
- 内容：家族の状況に係る情報の共有、各関係機関の支援方法の確認、保護者の養育に対する助言内容の確認

4 プランニング

- 小学校
 - ・校内ケース会議（教頭、学級担任、特別支援教育コーディネーター、養護教諭）で情報を共有するとともに、支援計画を作成し、保護者の理解の下、支援を行う。
 - ・学級担任は、児童Aの学校生活の様子を保護者に丁寧に伝えるとともに、保護者に寄り添った関わりに努める。
- 幼稚園
 - ・児童Aの弟の継続した日常観察を行い、園児の状況把握に努める。
 - ・園長と担当教諭は、保護者との面談で個別の支援体制及び支援内容を説明し、保護者の不安の軽減に努める。
- S S W
 - ・学校と情報の共有化を図り、具体的な支援方法を検討する。
 - ・ケース会議を実施し、各関係機関の役割と支援の在り方を確認する。
 - ・父親、母親、家族等様々な面談場面を設定し、保護者の悩みや不安を聞き取り、養育に対する助言を行う。

5 社会資源の活用状況

- 保健福祉課は、S S Wと情報の共有化を図り、保護者支援に努める。
- 子育て支援課職員は、S S Wと連携した対応を図る。
- S S Wは、学校との連携を密にするケース会議を実施し、支援策を検討する。

6 当該児童の変容（成果と課題）

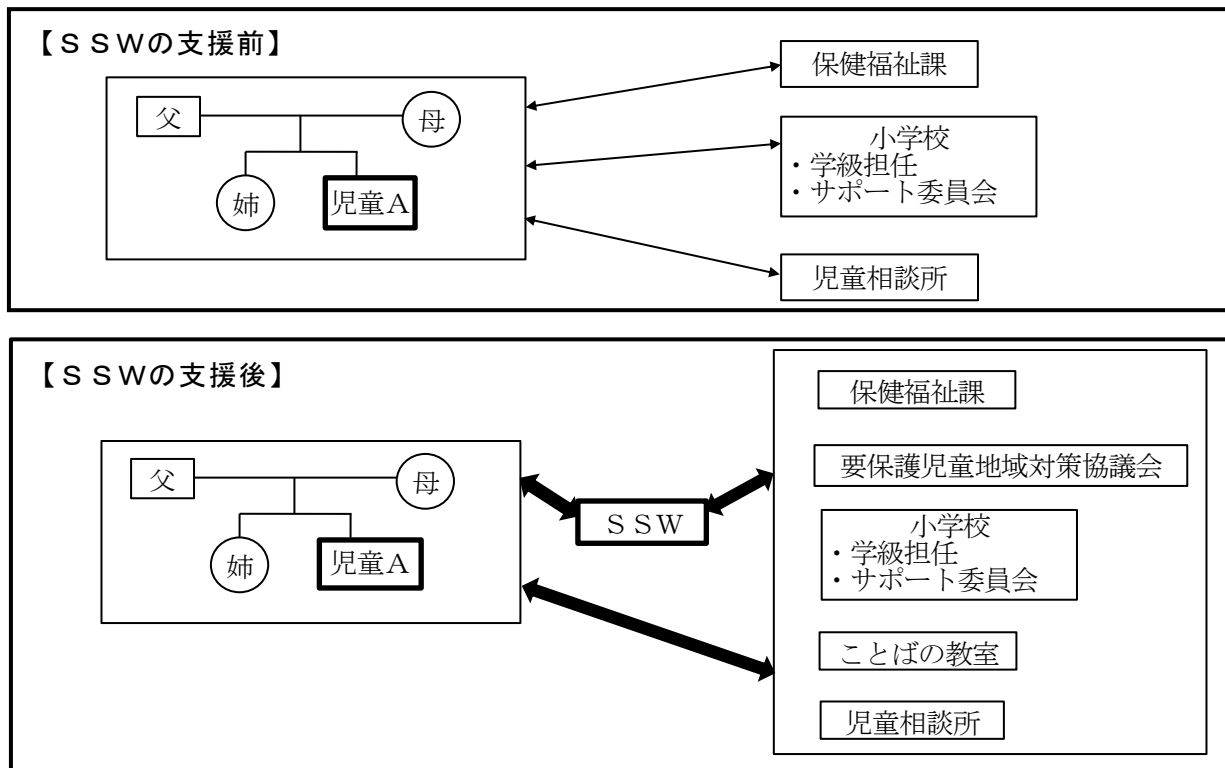
<成果>

- 校内ケース会議の支援計画に基づいた支援により、児童Aは、落ち着いた学校生活を送るようになった。
- 幼稚園における個別の支援により、児童Aの弟の問題行動は以前より減少している。
- 児童Aの父親が暴力的な養育を改め、子どもの気持ちを最後まで聴くことに努めたことにより、児童Aの精神的な不安は解消し、安定した生活につながった。
- 児童Aの母親は、兄弟それぞれに応じた対応を心がけたことにより、子どもの気持ちを理解して養育できるようになった。

<課題>

- 児童Aの成長に従い、新たな課題が予想されることから、保護者への支援を今後も継続する必要がある。
- 保護者が、養育に対してストレスを抱えてしまう可能性が考えられることから、S S Wは、定期的及び継続的に声掛け等の支援を行う必要がある。

保護者の養育を支援することにより、
当該児童が落ち着いた生活を送れるようになったケース



1 気になる状況

- 児童Aは、学校内において、他の児童とのトラブル、教師への暴言及び暴力、授業妨害、学校外において、ピンポンダッシュや花壇の花の切り取り、自転車による危険運転、同級生宅への上がり込み、店への無用な出入り等の問題行動を繰り返している。
- 児童Aは、父親からの暴力により、保育園年長時から複数回、児童相談所に一時保護されている。父親は、警察に対して児童Aを叩く理由として、「根性を叩き直すため」、「叱っている時の態度を改めさせるため」と話している。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童Aは「愛着形成障害及びADHD、ASD傾向」の診断を受けている。
- 検査を受けた結果、次のことが分かった。
 - ・ 知的能力は下位ではあるものの、基底年齢が3歳、上限年齢が7歳と、課題によって得意不得意の差が大きい。
 - ・ 言語処理能力が弱く、不注意、転動性が強い。
 - ・ 心理的不安定により規範から逸脱することが多い。
- 「行動と学習に関する基礎調査票」を基づいた学級担任及び母親による評価は次のとおり。
 - ・ ADHD（注意欠如多動症）とLD（学習障害）に係る質問の結果から、特に「不注意」、「多動性」、「衝動性」の傾向が強いことが明らかとなった。
 - ・ 「教科全般」「聞く」「コミュニケーション能力」がそれぞれ「要対策」であることから、社会的規範意識に基づいた行動が苦手で、言葉での注意や行動抑制の効果は低い。
- 児童Aの姉は、やや知的な遅れはあるものの、児童Aを加害者に仕立てて自分が叱られるのを回避する行動をとり、父親から可愛がられている。
- 両親は再婚同士であり、町内にそれぞれ元夫及び元妻、子（中学生・小学校高学児

童)と再婚相手が在住

- 児童Aの保護者は、夫婦仲が悪く、父親から母親へのDVがある。

(2) 学校での状況

- 児童Aは、授業に集中できず、教室内外を徘徊したり、他の児童に手を出したりする等、落ち着かない様子が多く見られる。
- 児童Aは、徘徊時に大人が探しに来ることを喜び、見付けると嬉しそうな表情をしたり、意図的に探さないでいると自分から出てきたりする様子が見られる。
- 児童Aは、食欲旺盛であり、給食の時間は着席し落ち着いて喫食することができる。

3 ケース会議の状況

(1) 校内ケース会議（計4回実施）

- 参加者：校長、教頭、特別支援教育コーディネーター、学級担任、学年教諭、教務担当教諭、特別支援教育支援員、SSW
- 内容：児童Aの状況及び今後の対応に係る情報共有
各関係機関における児童A保護者への対応状況の確認

(2) 児童相談所とのケース会議

- 児童福祉司、学級担任、子育て支援課職員、SSW
- 虐待や児童の状況及び一時保護所での検査結果や行動観察等の情報共有及び状況確認

(3) 要保護児童対策地域協議会

- 児童福祉司、警察署生活安全課、教頭、子育て支援課職員、生涯学習課長、SSW
- 情報共有及び今後の対応の確認

(4) SSWによる母親との面談

- 面談による児童Aの状況確認及び母親への助言
- 特別支援学級在籍に係る意思確認等

4 プランニング

- 関係機関との連携を図った具体的取組
 - ・学校：全教職員による情報の把握及び共有、適切な支援体制の構築
 - ・保健福祉課：家庭支援及び要保護児童対策地域協議会に係る日程調整及び相談援助
 - ・SSW：児童Aの保護者との相談支援及び学校や福祉係等、関係機関との連絡・調整、学級担任及び支援員等との情報交換を行うとともに、校内サポート会議に参加し、状況確認や具体的対応等の助言
 - ・児童相談所：保護者支援及び児童Aの発達確認

5 社会資源の活用状況

- 保健福祉課福祉係や児童相談所
 - ・児童Aの状況や各関係機関での支援状況を共有することにより、相談及び支援の参考としている。
 - ・要保護児童対策地域協議会等、児童福祉司同席の下、ケース会議を実施している。

6 児童生徒の変容（成果と課題）

<成果>

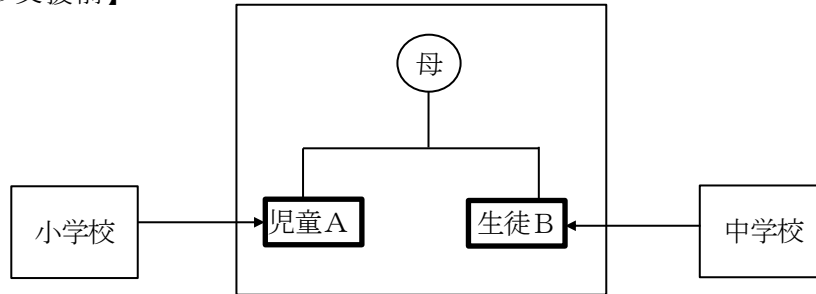
- 学級担任や保護者による適切な声掛けにより、児童Aの適応行動が増えた。
- 学校において、児童Aの実態に合わせた個別学習を設定することにより、集中して学習に取り組むことができるようになり、「勉強が分かると嬉しい」と話す等、学習に対して前向きな様子が見られるようになった。

<課題>

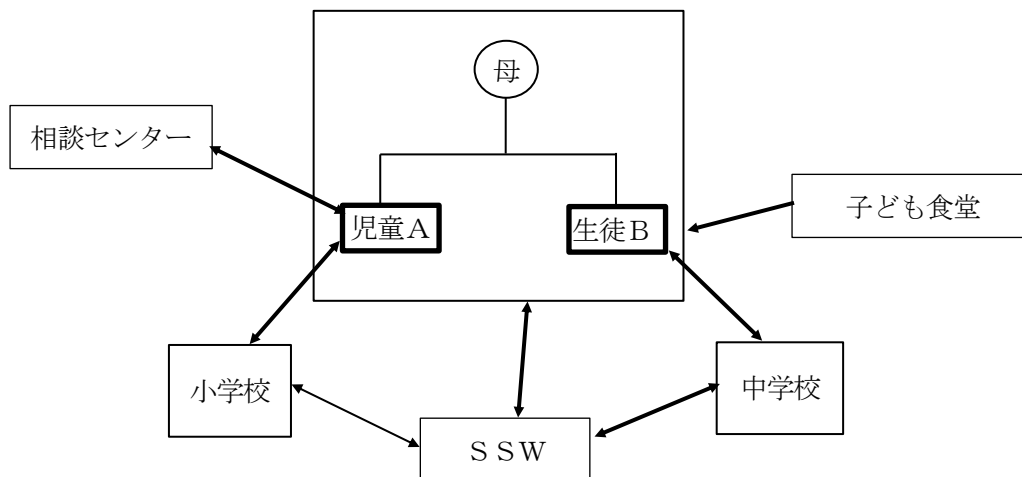
- 児童Aの問題行動等は、心理的な課題とともに、児童Aが置かれた環境による影響が大きく関わっていることから、今後も関係機関が連携し、家族への継続したアプローチを行うことにより、児童Aが安心して生活できる家庭環境の構築を進める必要がある。

養育に課題がある家庭に対し、子どもにアプローチをして支援を進めたケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 児童Aは小学校第5学年の終わり頃から、授業中に2～3回トイレに行くようになり、特に学校行事の際は何度もトイレに行くことが心配になり、欠席するようになった。
- 生徒Bは、遅刻が多く、給食の前に登校するなど、生活リズムが乱れており、中3になってからは、喫煙や窃盗、深夜徘徊などが目立ち、不登校傾向となった。
- 自宅は、生徒Bの友人のたまり場となっていることから、中学校は母親の養育能力に課題があると捉えた。
- 中学校は、相談センターなど関係機関と母親をつなげようとしたが、母親が相談センターとの面談を希望しなかったため、SSWが同席して懇談を行った。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 児童A、生徒B、母親の三人暮らしであり、準要保護世帯である。祖父母は市外近郊に在住し、年に数回の交流がある。
- 母親は週に数回は食材を買ってくるが、食事を作ることはほとんどない。母親の帰りが遅いため、児童が自分で食事を作り、一人で食べている状況である。
- 児童Aは、休みの日においても一人で過ごし、一人で食事をすることが多い。
- 児童Aは、読書をしたり、工作をしたりすることが好きである。学校の宿題は、遊ぶ前に終わらせ、必ず期限を守っている。
- 児童Aは、週1回の学級担任以外の教員と話す時間を楽しみにしている。

【 小学校・中学校① 】

- 生徒Bは、校外での問題行動が見られるものの、学校においては、学級担任と良好な関係を築いている。
- 生徒Bは、有職少年と交友関係があり、外泊することがある。
- 生徒Bは、S S Wや相談センター職員との面談に対し、嫌がることなく応じる。
- 児童Aと生徒Bの仲はあまりよくないが、食事などについて互いに気にかけている様子がある。
- 母親は生徒Bが遅刻しても注意したり、叱ったりすることはない。
- 母親は小学校のP T Aの役員を引き受けたり学校行事と一緒に参加したりしている。
- 母親には交際している男性がおり、土日に外出することがある。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学級担任以外の教員が週1回、児童Aと面談した際に、「母親が食事を作ってくれないから自分で作って食べている」「母親は家に居ないこともある」などと聞いたことから、学校は、家庭環境に問題があると考え、S S Wに相談し、S S Wが児童Aと面談した。
- 児童A及び生徒Bに関わる情報を共有できるよう、S S Wが中心となり、学校の学級担任、相談センター職員が定期的に協議する場を設定した。
- S S Wが中心となり、児童A及び生徒Bの学校生活の様子などの情報を共有し、支援体制を整備した。

3 ケース会議の状況

【1回目】

- 参加者：中学校（教頭、学級担任、学年主任）、S S W
- 内容：小学校の情報を基に中学校で情報共有
母親へのアプローチについて

【2回目】

- 参加者：中学校（教頭、学級担任、学年主任）、相談センター職員、S S W
- 内容：相談センターにおける家庭に対する支援について
生徒Bの卒業後の支援と母親へのアプローチについて

※小学校、中学校ともにS S Wの拠点校であり、日常的に情報共有を行っている。

4 プランニング

- 小学校：児童Aとの面談を通して家庭の様子を把握
- 中学校：進路相談、生活指導
- 相談センター：母親へのアプローチ、中学校卒業後に向けた生徒Bとの面談
- S S W：小学校における児童Aとの面談の継続、相談センターとの連絡調整

5 社会資源の活用状況

- 相談センターと連携した家庭に対する支援
- 子ども食堂と連携した児童に対する支援

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

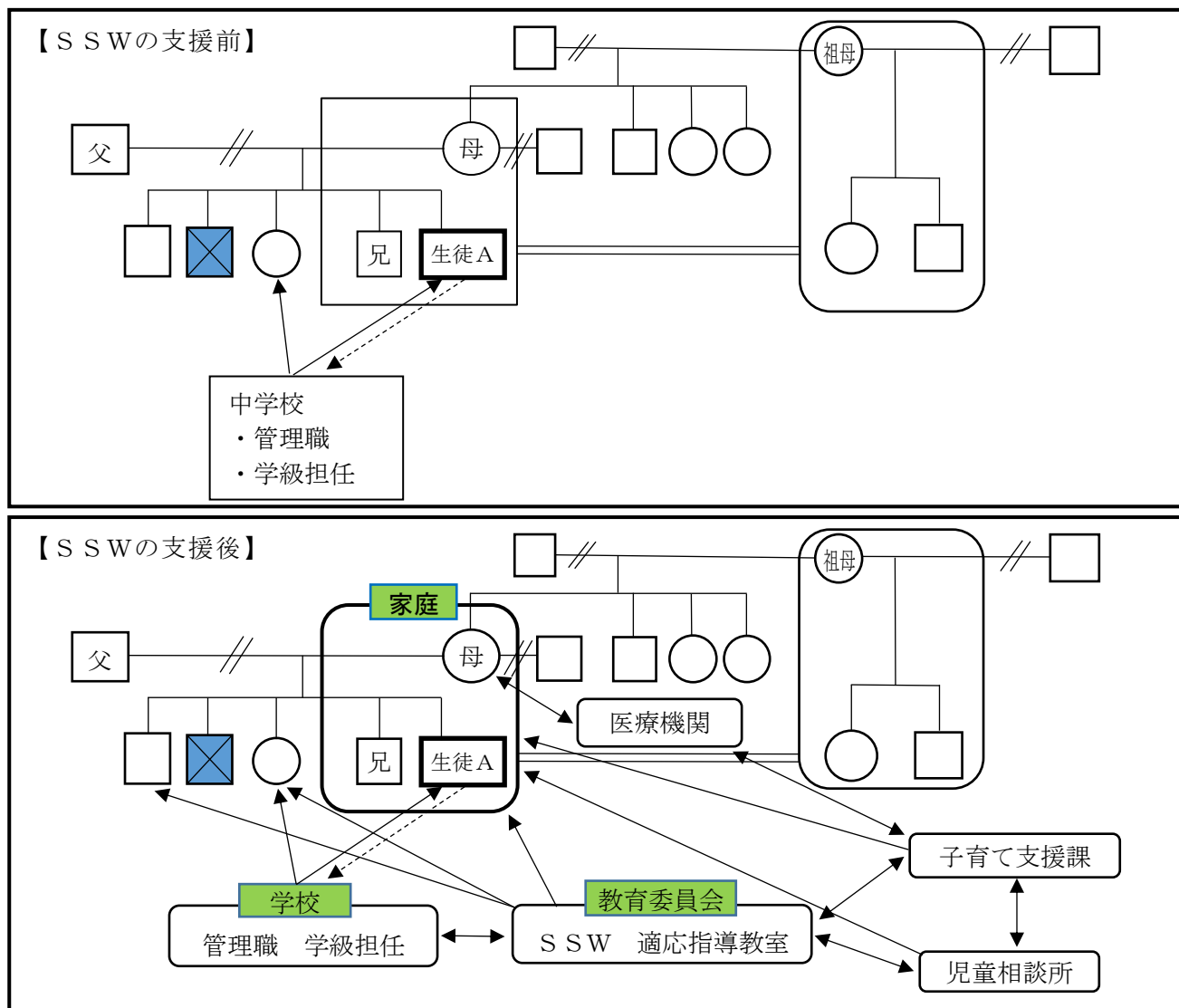
<成果>

- 学校及び関係機関と連携し、児童A及び生徒Bとの面談を継続的に実施したことにより、実態を詳細に把握し、支援策を講じることができた。
- 小・中学校間において、児童A及び生徒Bに関する情報共有を円滑に行うことができた。

<課題>

- S S Wが中心となり、学校と関係機関の連携を継続して行うことにより、家庭生活の改善に向けた具体的な支援を進める必要がある。

家庭環境の悪化が不登校に拍車をかけた生徒を支援したケース



1 気になる状況

- 生徒Aは小学校第4学年から、生徒Aの兄は小学校第5学年から不登校傾向となり、兄は中学校第2学年の6月から、生徒Aも中学校第1学年の6月から、全く登校できなくなった。
- 生徒Aは、SSWの提案により、適応指導教室に通級し始めた。当初は遅刻しながらも通級していたが、中学校第3学年になってから、ほぼ通級することがなくなった。
- 生徒Aは、生活のリズムが崩れ、不規則な生活を過ごしている。
- 中学校入学当初は、定時制への進学を希望していたが、現在は、進学する意思が薄れつつある。
- 母親は、入退院を繰り返し、体調が回復しない状況である。
- 母親に養育能力がないため、別居の生徒Aの姉が、生徒Aの世話をしているものの、生活環境は整っていない状況である。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 両親は離婚し、母親が生徒Aを含む子どもたちを養育することとなった。兄弟はとても仲がよく、また、叔父とも仲がよいため、頻繁に一緒に遊びに出かけることがある。
- 生徒Aは、小学校第4学年まで、祖母宅の近くに住んでいたが、転居したことにより、友達関係を築くことができず、不登校傾向が強まった。

- 生徒Aは、別居している生徒Aの姉から世話されることが多い。
- 生徒Aは、自由奔放に生活しており、午前中は、ほぼ寝ている状況である。
- 母親は、アルコール依存症のため、循環器や内臓の疾患があり、入退院を繰り返している。
- 母親は、家事をほとんどせず、子ども任せにしている。
- 母親には、交際相手があり、家を空けることがある。
- 母親の入院中の子どもたちの養育について関係機関等が協議し、児童相談所の一時保護を提案したが、母親及び生徒Aの同意が得られなかったことや、祖母を中心に家族で話し合ったが、児童相談所への一時保護に反対する意見がほとんどであった。

(2) 学校との情報共有の状況

- 生徒A及び母親は、多くの課題を抱えており、中学校の管理職や学級担任が中心となり、SSWや子育て支援課、児童相談所と情報を共有し、対応策を協議し課題の解決に当たっている。

3 ケース会議の状況

- ケース会議を5回実施し、生徒Aの状況の把握や支援策について協議を行った。

【参加者】：祖母、長男、長女、中学校教頭、高校教諭、市教委SSW、適応指導教室指導員、児童相談所（児童福祉司）、子育て支援課職員、福祉課職員、病院相談員

【協議内容】：①家庭環境の状況把握 ②各機関の支援経過の確認
③課題の明確化 ④今後の支援について

4 プランニング

- 母親の療養を適切に行い、健康を維持することについて支援する。
 - ・子育て支援課や児童相談所が中心となり、体調不良でありながらも、入院を決意することができない母親を支援する。
 - ・子育て支援課や児童相談所の支援に続き、SSWが家庭訪問を継続しながら、母親に助言する。
 - ・母親の入院中は、医療機関との連携を密にして支援する。
- 母親の入院中の生徒Aの養育や生活環境に対する支援体制を構築する。
 - ・SSWが家庭訪問を行い、生活環境の把握に努める。
 - ・各関係機関との連携を図りながら、情報を共有する。
- 生活環境の改善と適応指導教室への通級に対する意欲を高める。
 - ・SSWが家庭訪問を行い、生徒Aの適応指導教室への通級について働きかけを続ける。
 - ・SSWが母親、姉や兄に対して、生徒Aの通級に向けた働きかけの支援をお願いする。
- 途切れない進路希望の構築のためSSWが支援する。
 - ・生徒Aと面談を行い、将来の夢や希望を明確にさせ、進学希望を持続させる。
 - ・学校と連携しながら、三者懇談や高校説明会の参加について支援するとともに、進学に係る諸手続について、適宜、確認の声掛けを行う。

5 社会資源の活用状況

- 学校関係者、児童相談所（児童福祉司）、SSW、適応指導教室指導員、子育て支援課職員、医療機関相談員と情報の共有を行った。
- 総合的な判断の下、個別のケース検討会議を継続して行うとともに、生活環境の整備に関わり、関係機関等と連携を図りながら支援を行う。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

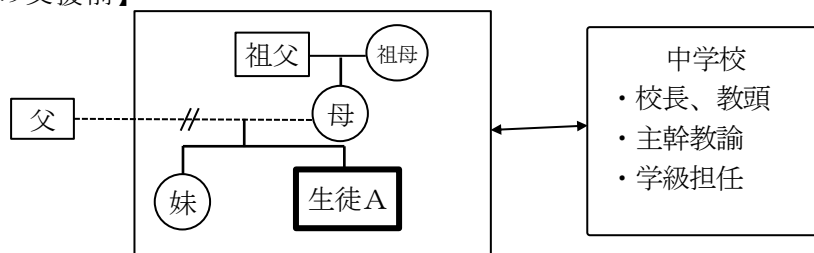
- 生徒Aは、通級日数に差はあるものの、中学校第1学年から第2学年までは、適応指導教室への通級ができた。
- 生徒Aは、進路を決める三者懇談においては、姉とともに登校し、自分の意思を示し面談することができた。
- 生徒Aは、進路への希望をもち、高校説明会に参加するとともに、願書を提出することができた。

<課題>

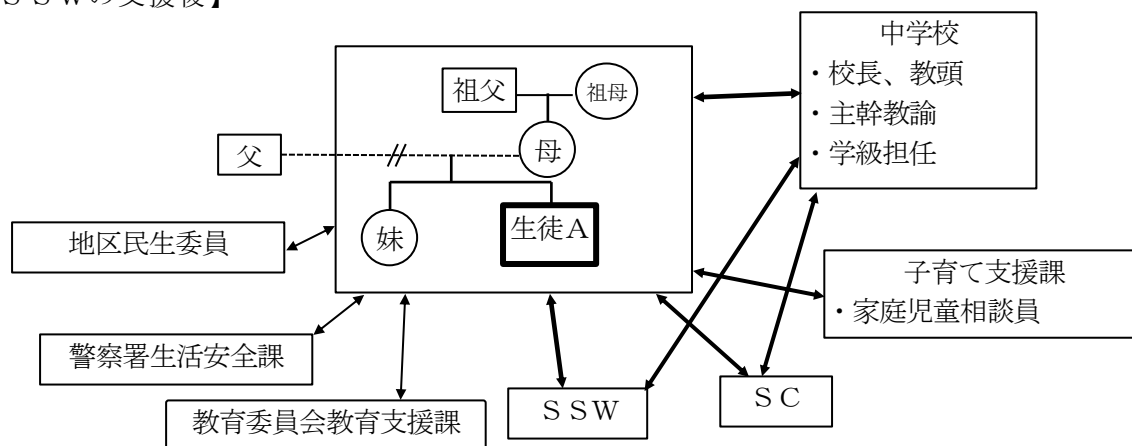
- 今後も生活環境の整備と生活リズムの改善に向けた取組を進めるとともに、将来を見据え、進学に対する希望をもたせるための働きかけを継続する必要がある。

情緒が不安定な生徒に関係機関と連携し働きかけたケース

【 S S W の支援前 】



【 S S W の支援後 】



1 気になる状況

- 生徒Aは、中学校第2学年の1学期以降、生活リズムが不安定になり、遅刻が常態化するようになった。
- 生徒Aは、中学校第2学年の2学期以降、家庭において、物に当たるなどの行為が徐々に増え、学校でも他人に暴力を振るうなどの行為を行うようになった。
- 生徒Aは、中学校第3学年になり、以前所属していた運動部に復帰して、真面目に練習に取り組み、中体連に出場したが、部活動の引退後から、教師の指導に反発することが多くなった。
- 生徒Aは、進路についての不安から、学級担任に対し、「高校に行かない、働きたくない、勉強もしたくない、親を殺して刑務所に行く」と話すなど、心理的に非常に不安定になった。
- 母親は、生徒Aの養育に自信をなくし、学校に相談してきたことから、子育て支援課、教育委員会、警察署、地区民生委員、学校がケース会議を実施し、支援することになった。

2 アセスメント

- 生徒Aの家庭状況は、母と妹、祖父母の5人家族で、祖父母宅で生活しており、生徒Aは、母親の2回の離婚に対して不満を持っている。また、生徒Aは、生活について、祖父母から強く叱責されることがある。
- 生徒Aの中学校第1学年時の発達検査では、生徒Aに知的発達の遅れがあることが懸念され、能力のアンバランスさが特徴的という診断を受けた。検査結果から、「口頭での指示」や「抽象的な用語」は、生徒Aにとっては大変難しいものと考えられた。
- 生徒Aは、定期テストにおいて、名前だけを書いて提出するなど、中学校の学習についていくことが難しい学力である。
- 生徒Aは、体育祭などの学校行事には、進んで参加する。

- 同学年に仲のいい友達がいるほか、特に第1学年の生徒と遊ぶ時は、生き生きしている。
- 生徒Aは、運動能力が高く、第1学年から運動部に所属していたが、家庭状況の不安定さから精神的に落ち着かない時期があり、退部と再入部を繰り返していた。
- 生徒Aは、部活動引退後から、教師の指導に従わなかったり、他人に暴力を振るったりするなど、粗暴な面をエスカレートさせていった。
- 生徒Aは、中学校第3学年の7月、精神面の不安定さと学習面の遅れを心配した学級担任に勧められ、母親と一緒に教育相談を受けた。教育相談では、学級担任との面談のほか、生徒Aに対してWISC等の検査を行った。その結果を受け、学級担任は、生徒A及び母親に対し、特別支援学級での学習が望ましいということを伝えた。
- SSWは、学校から生徒Aの学校や家庭での様子、保護者対応の状況、子育て支援課から母親や家庭内の現状及び支援策の経過・内容などの情報提供を受け、それらを整理した上で、学校、教育委員会教育支援課、子育て支援課とケース会議を行い、情報を共有した。

3 ケース会議の状況

- 第1回
 - ・参加者：校長、教頭、主幹教諭、学級担任、地区民生委員、SSW、教育委員会教育支援課、子育て支援課、家庭児童相談員、警察署生活安全課
 - ・目的：情緒が不安定な生徒への指導と対応について
- 第2回
 - ・参加者：校長、教頭、主幹教諭、学級担任、地区民生委員、SSW、教育委員会教育支援課、子育て支援課、家庭児童相談員、警察署生活安全課
 - ・目的：現状の確認と今後の対応について

4 プランニング

- 学校は、生徒Aの教育的ニーズを把握し、生徒Aや母親の意見を十分に尊重しながら、特別支援学級や通級による指導も含めた学びの場について考える。
- 学校は、生徒Aにとって「心の居場所」となるよう、SCを活用し、生徒Aの精神的なケアをするとともに、学校全体で組織的な対応ができる体制づくりを進めるように促す。
- 子育て支援課やSSWは、家庭に対して、養育や家庭環境の改善について助言する。

5 社会資源の活用状況

- ケース会議において、地区民生委員、子育て支援課、家庭児童相談員と情報交流し、問題行動解消に向けて、生徒Aと母親への支援策を検討した。
- 子育て支援課は、母親との面談を実施し、相談・支援を進めている。
- SSWは、学校との緊密な連携の下にケース会議を開催して対応策を検討するなど、支援の方向性を探っている。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

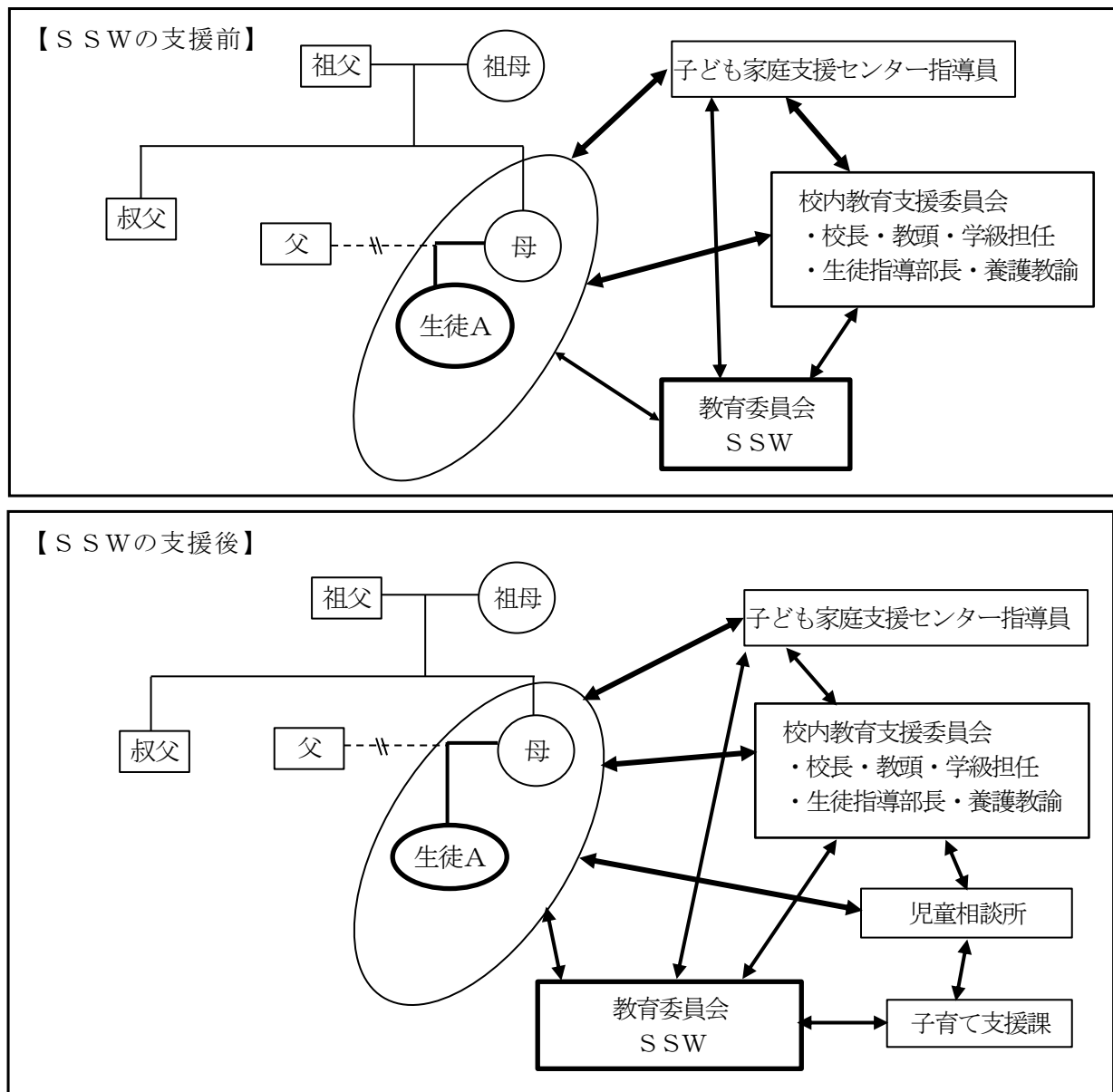
<成果>

- ケース会議を開催し、生徒Aの家庭環境等について情報を共有し、各機関の支援の方向性を確認することができた。
- 学校で行ったWISC等の検査の結果を踏まえ、生徒Aは、自分の特性を理解し、学校や家庭での学習指導や生徒指導に生かすことができた。また、生徒Aは、特別支援学級で自分のニーズにあった指導を受けることにより、学校生活への意欲が高まった。
- 問題行動の原因が、学校生活、生徒Aの特性、家庭環境など多岐に渡っているため、難しく、改善までに時間がかかったが、生徒Aの生活などが改善された。

<課題>

- 将来についての見通しをもつことが難しいことから、生徒Aの友達関係の改善を図ったり、自己肯定感を醸成したりすることによって、進路について希望をもつことができるようになる必要がある。

学校不適応と母子関係の修復を目指したケース



1 気になる状況

- 生徒Aは、中学校入学から間もなく、友人と口論になり、相手に謝ってもらっていないことを理由に学校を欠席するようになった。
- 生徒Aは、起床のリズムが乱れ、母親が出勤するまでに起きられないことがあり、近所に住む祖父母が登校を支援していた。
- 生徒Aは、こだわりが強く、自分の思い通りに事が運ばないと不機嫌になったり、友人に対し、自己中心的な発言をしたりする面があった。
- 学校は、生徒Aに対し、生徒のペースに合わせた学習進度にしたり、欠席による学習の遅れに対応したりするため、個別の学習体制を整備していた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aが小学校4年生のときに、母親の故郷の小学校に転校した。
- 生徒Aが小学校高学年のとき、オンラインゲームのデータ破損等が原因で友人とトラブルになり、それ以降、友人関係が希薄になった。
- 生徒Aは中学校に入学後、欠席が多くなり、親子の間では、フリースクール等の利用を検討していた。
- 心療内科を受診し、自閉症スペクトラムの疑いがあると診断された。

(2) 学校と情報共有の状況

- 生徒Aは、別室での個別学習に取り組んでおり、母親に個別学習に対する不満を訴えた。
- 保護者と話し合いを進め、生徒のペースに合わせて学習に向き合えること、仲間との学習にも参加できることなどから、特別支援学級への在籍変更となった。
- 第2学年に進級し、4月は登校したが、7月以降ほとんど登校しなくなり、不登校状態が続いた。
- 親子喧嘩がエスカレートした際、母親が相談機関に養育に関して電話相談するとともに、児童相談所担当者と面談している。

3 ケース会議の状況

- 回数 6回（校内教育支援委員会と兼ねる）
- 参加者 校長、教頭、学級担任、生徒指導担当教諭、養護教諭、SSW
- 主な内容 状況の把握と今後の方針についての協議

4 プランニング

- 学校
 - ・生徒Aに対する支援体制を確立し、関係機関と定期的に情報共有を行う。
- 子ども家庭支援センター
 - ・親子関係の改善に向けた取組を重点的に行い、家庭訪問し生徒Aと母親にカウンセリングを実施する。
- SSW
 - ・主に、母親の養育に関する相談に対応し、助言を行う。

5 社会資源の活用状況

- 教育委員会、子育て支援課、児童相談所、子ども家庭支援センター等が連携を図り、生徒Aとその保護者に対する支援体制を構築した。
- 生徒Aに対し、学校以外での活動場所を確保した。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

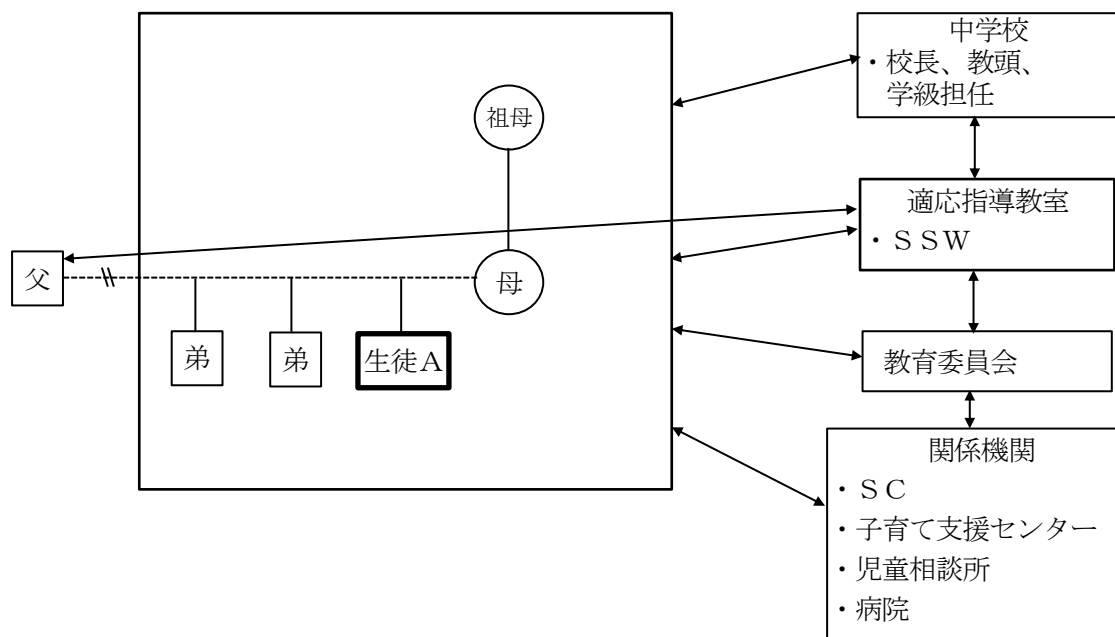
- 関係機関と積極的に情報共有を行ったことにより、生徒A及びその保護者に対する適切な支援体制が構築することができた。
- SSWが母親の養育に関する相談を丁寧に行ったことにより、母子関係の改善につなげることができた。

<課題>

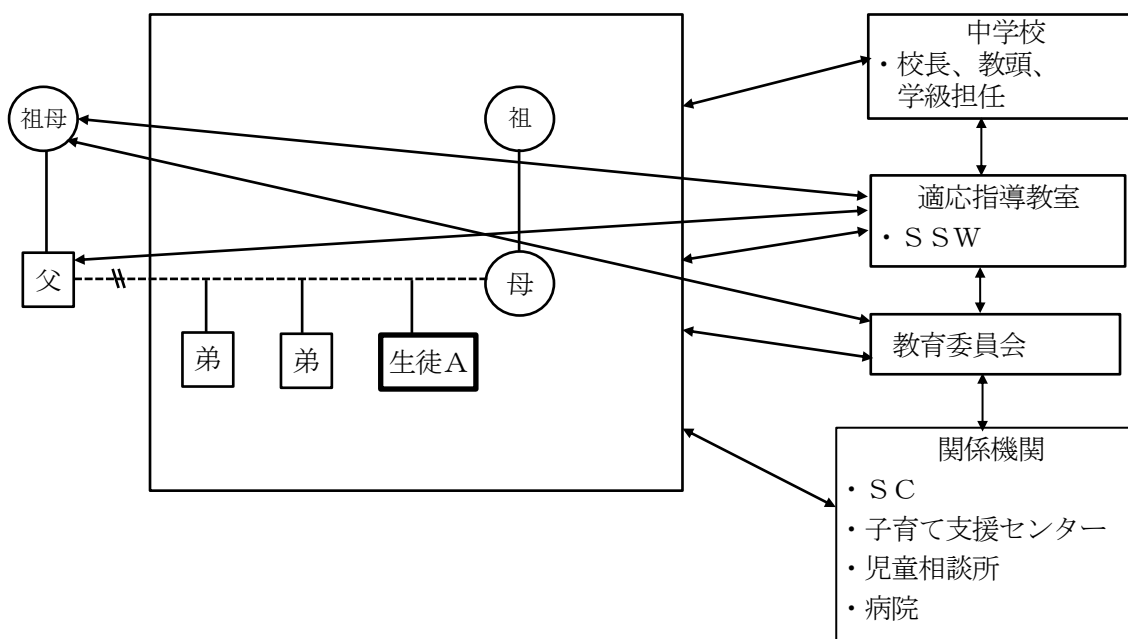
- 保護者の養育に対する困り感を払拭するため、学校や関係機関における相談支援体制を充実する必要がある。

学校と関係機関が連携して養育環境を改善し生徒を支援したケース

【 S S Wの支援前】



【 S S Wの支援後】



1 気になる状況

- 生徒Aは、中学校入学当初は登校していたが、それ以降休みがちになった。毎日のように学級担任や管理職が生徒Aを迎えに行っていた。
- 昼夜逆転の生活が続き、病院から睡眠導入剤を処方されていたが、薬の副作用により昼間もぼんやり過ごすことが多くなったことから、薬は処方されなくなった。
- その後は落ち着いた生活をしてしていたが、再び、朝起きられない状況になっていった。
- 母親の精神状態が安定せず、帰宅したくない旨を話すことが多くなった。

【 中学校⑰ 】

- 母親が入院中は、祖母の家での生活が多くなった。一時は祖母のことを聞いて規則正しい生活をしていたが、再び昼夜逆転のような生活が多くなっていった。
- 何かに取り組んでも継続することができずにいた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 生徒Aは、母親・弟・本人の4人家族である。母方の祖母が同じアパートに住んでいるため、すぐに行き来ができる。
- 離婚している父親が時々来て泊まっていく。
- 父方の祖母は、生徒Aや弟のことをかわいがっていることから、休日や長期休業中には父方の祖母の家に遊びに行っている。
- 母親は精神的に不安定なため、入院することがある。その場合は、母方の祖母が生徒Aの食事の面倒を見ている。

(2) 学校との情報共有の状況

- 生徒Aは適応指導教室において、SSWと適宜情報交流を行っている。
- SSWが中心になり、ケース会議の開催を働きかけたり、学校や関係機関と連携を取ったりするなど支援を行っている。

3 ケース会議の状況

- 構成員：中学校学級担任、中学校管理職、相談員（SC）、適応指導教室職員、SSW、教育委員会、役場担当者（福祉課、こども課、発達支援センター）
- 内容
 - ・生徒A及び家庭についての情報共有を図り、今後について協議した。
 - ・母親に対する生活及び精神面の支援と祖母との連携を密にしていくようにした。

4 プランニング

- 生徒Aは、適応指導教室で過ごすことを希望していることから、本教室が該当生徒の居場所になるよう努め、学習支援や生活習慣の立て直しを図る。
- 母親に精神的な負担をかけないように、祖母との連携を密にし、適応指導教室に朝から来られるような生活習慣を身に付けさせる。
- 子育て支援課との連携により、母親の支援も行う。

5 社会資源の活用状況

- 役場担当課との連携により、母親の生活支援を継続している。
- 発達支援センターの臨床心理士との連携を密にし、支援の詳細化を図っている。
- 適応指導教室と学校の連携により、学習支援と共に、登校に備えての情報交流を行った。
- 教育委員会との連携により、母方と父方の祖母を交えての話し合いを行った。

6 当該生徒の変容（成果と課題）

<成果>

- 適応指導教室の生徒の中に友達ができ、休日には一緒に遊びに行くようになるとともに、互いに相談相手として信頼関係が構築された。
- 生活は不規則であるが、午前中から来所し、学習に対し意欲的に取り組むようになった。
- 母親の精神的負担を軽減するため、関係機関の協力を得ることで、生徒Aの精神状態が安定し、表情も明るく豊かになってきている。
- 生徒Aは適応指導教室来所時、自分が行いたい活動を明確に意思表示し、職員の支援の下、意欲的に取り組んでいる。

<課題>

- 中学校卒業後を見通した具体的な目標を設定し、見通しをもたせる取組の必要がある。
- 健康的な生活をするため、就寝時刻が遅くならないよう自覚を促す必要がある。